

思い出つれづれ中学時代

吉元昭治

昭和三年、神田で生まれ、幼稚園で満州事変、小学校入学時支那事変、中学校入学時大東亜戦争、医学校入学してしばらくして敗戦という稀有な十五年戦争と共に育った少年、青年時代の人間である。級友も全く同じ、「小国民」「愛国少年」などといわれて、多感な発育期を戦争と共に過ごしたのである。

城北中学の名を知ったのは、ある新聞で「府立四中の深井鑑一郎氏が新しく城北中学を開校する」というのを知ったからで、当時小学校を出て何処の中学校を受験しようかと迷っていた。伝統ある校風や、大学進学の実績もない新しい学校ではと考えたが、一番もいいではと思って受験したら幸い合格できた。以下、順序・前後不同、思い出すままつづるので、何分古い事でもありもし間違っていたらお許しを願いたい。

約百五十名の級友が揃ったが、都内有名小学校から多く入り、自分のような下町の小学校からは単独、心細くもあつた。同じ神田駅から通う級友は阿部、藤城、田副君らであつた。市ヶ谷駅（現在と余り変わっていない）でおり、濠を渡り左内坂を登り、城北予備校の一部を間借りする仮校舎であつた。向こうは市ヶ谷陸軍士官学校でラッパの音が響いてくる。

この佐内坂の中途右に「ウーケーリツチ」という標札の家があつた。のちに「ゾルゲ」事件というスパイ事件の一味の家であつた。

十二月八日、寒い朝、学校の朝礼の時「本十二月八日未明、我が陸海軍は南太平洋において米英軍と戦争状態に入れり」という大本営発表、平出大佐アナウンスをラジオで聞かされた。これは大変なことになった。果して勝つのだろうかと思つたが、我が国は「神州不滅」だと思つたりした。

朝礼時には全員上半身裸になり乾布摩擦、数学の中島先生の「エイシヤ」の掛声でする。先生はそれで「エイシヤ」というニックネームをいただいた。しかしこのお蔭で生来虚弱的であつたが丈夫になり今日に到つていて、この点感謝している。体操では左内坂、市ヶ谷八幡の階段をかけあして昇つたりおりたり、音楽の時間は音楽教室がないので隣の富久小学校の音楽教室をかりた。音楽の先生（のちに芸大教授になられる）は我々に英語がだめならドイツ語と、ベートーベンの第九、「歓喜の歌」を教えて下さつた。小さい口をあけ「オーフロイデ」と訳も分からぬまま歌っていたが、戦後こんなに有名な歌になるとは考えもしなかつた。

った。英語は寺カン先生、若いハンサムな先生で「クラウンリーダー」
でよく教えて下さったが結核にかかり若くして亡くなる。その後は難波
先生。先生の英習字はピカーに美しかった。のちにスコットランドの詩
人、ロバート・バーンズの研究の第一人者となり日大教授になられた。

自分が小平市で開業（昭和三十八年）、同じ市内に引越してこら
れ、いろいろ御病気の相談にあづかったが、肝臓疾患で亡くなられた。

恩師を診させていただいたのは全くの光栄であり、御恩返し少しはで
きたのではないかと慰めている。奥様もやはり患者としてこられている。

西洋史はのちに角川書店を立ち上げる角川先生で、ある時授業中「ロ
ーマとカルタゴの戦争はなんというか」といわれ、咄嗟に手を挙げ「ポ
エニ戦争といえます」というと級友はポカンとして口をあけて見ていた。
実はこれには訳があり、これより前、イタリー映画で「スピキオ」とい
うのがあった。ローマの勇将、スキピオ（シピオーネ）が宿敵ハンニバ
ルをカルタゴのザマで破った映画をみていたからである。それ以後、

「ポエニ」というニックネームをもらったが、「ポエニ」というのは面
倒くさいらしく単に「ポエ」になってしまった。もう一つは英語の時間、
「ティーチャー」の発音がどうした訳か「テエチャー」となり笑い物に
なり、「テエチャー」という名もつけられた。

三年生になる頃、新校舎が完成し、一年間過ごした仮校舎の赤塚小学
校から上板橋へ移った。その引越したが、机を運ぶのに級友と二人で
かつぎ、下赤塚から上板橋まで歩いて運んだ覚えがある。

上板橋への登校は電車（東上線）に乗ることは禁じられ、今の東武デ
パートの横から我々最上級生がリーダーとなり川越街道を上板橋まで徒
歩でゲートルを脚にまき集団登校した。帰りは電車に乗ってよかった。
ズボンのポケットは縫って閉じ、手が入らぬようにした。

校舎はゆるい丘をへだてて向こうに牛の放牧があつたり富士山もよく
見えたが、防空壕をつくる作業もあつた。

先生方も若い先生は軍隊にとられ、老先生が教壇に立つようになった。
村野先生はクラス担当の先生で漢文、自分が今や中国古典を何とかよ
めるのも先生のお蔭と感謝している。勤労働員中も工場の片隅で授業を
して下さった。飯島先生は英語の先生、ニックネームはゲーテ。「勝つ
ても負けても英語は必要だ」とおっしゃった。数学の老先生は因数分解
を教えて下さったが、間違っているかもしれないがその公式は今でも覚
えている。
$$-b \pm \sqrt{b^2 - 4ac} / 2a$$
もう不思議なおもいがしている。

そのうち戦雲ただならぬものがあり、五年卒業が四年卒業にくり上げ
られ、勤労働員が始まる。桐山伸鋼所という上板橋と常盤台の中間位に

あった工場で、アルミのインゴットからローラでのばして飛行機のアルミ板をつくる単純作業であった。工場でひる食を出してくれるのは食糧難のころ有難かった。ある日工場内のマグネシウムの塊りが火をふき、憲兵がとんできた。またある時敵P・51、ムスタングが近くにおち、見に行ったら直径十メートルくらいの深い穴が地上にあき、そばで馬が気絶していた。このP・51には新宿駅、富士吉田でもおめにかかり、いずれも低空でやってきて機関砲をうってくる。富士吉田の敵機は何もない山の方に機関砲をうち、反転し富士山の方に飛んで行った。富士山見物にきたのだろうか。のっている操縦士の頸の白いマフラーまで見えた。月給二十円ただくが、買うものは何もなく、食べる食堂もなく、映画館に行くも補導が待っているし、使い道もなかった。

そのうち富士の演習場に教練実習に向かった。先頭は体の大きい川本茂木、福島君らが軽機関銃をかつぎ、我々は三八式歩兵銃を肩にかついで行進する。この銃は中学生の我々の背丈に近い大きさを重たかった。

汽車の中で、当時戦災に会い知人宅にころげこみ、この家は大審院（今の最高裁）判事の方で、物資もあり、子供もいらっしやらないのでかわいがってくださいと、弁当にハムを入れてくれた。それを食べていたら「お前さつきハムを食べていたな」とにらまれた。教官は海老沢中尉というもう退役だったが、再召集で戦死された。もう一人の教官は鈴木教官でまだお若かったが、ある教練の時間に整列を乱したと軍刀を抜き、級友の一人を切りつけた。あわやと思っただがみね打ちでホッとした。藤城君（故人）である。話は富士演習場にもどって、必ず夜間非常呼集があると、思いゲートルをまいて寝ていた。果して非常呼集がかかりとびおきたが早めにかけてつけられた。もし遅れるとビンタが待っている。

そのビンタを自分もいただいている。国語の石田先生の時間、ちよつとコックリしたら見つかり、廊下に立たされ、挙句の果て、一発いたっていた。やはり痛かった。いまだに「不動の姿勢は軍人基本の姿勢にして、内に精神充実し、外厳肅端正なるべし」と「歩兵操典」を覚えている。

いよいよ戦争も末期となり、昭和十九年十一月には神田駅近くにいた阿部君が戦災にあう。母のいっつけでフトンをかっいでいったが、今度は二月二十五日の雪の降る夜、B29大編隊がやってきてこちらが被災。敵編隊は駿河湾を北上、富士山上空を右旋回、偏西風にのり西方向から東京上空にやってくる。「東部軍管区情報」「警戒警報」「空襲警報」「警報解除」となるのだが、サイレンの響きは不気味に昼夜をとわずなりわたる。焼夷弾を束ねた「モロトフのパン籠」を落とす。火花をちらしておちてくるさまは恰も花火のようだが、直撃をくつたらおしまいであ

る。おちきつたのを待つて防空壕（家の前の道路をほったもの）を飛び出し、柄の長いぬれたモップで畳の上に刺さつて火をふいているのは簡単に消せるが、天井うらにとまっているのがあつて遂に全焼。町内全体が被災する。リヤカーに手当たり次第荷を乗せ、当時淡路町にあつた家（現神尾病院）に逃げた。敵は焼夷弾の間に爆弾をまぜておとし、隣町の防空壕は全滅した。この逃げる途中、中央線のガード下で突然火の柱が上がり、うずを巻き踊るようにぐるぐると迫ってくる。火は風をよぶのである。これにまきこまれて亡くなつた方もいる。まず目がやられ、顔はススで黒くなる。

三月十日には例の大空襲があり、死者十万人という被害をうける。三筋町にいた山田 篤君は士官学校の入学もきまつていたが、そのまま行方不明となる。すぐ近くの松田君は無事だったので人の運命も分からないものだ。被災しても寒さは寒い、食べるものもなく、国の援護も期待できず、よく生きていたがどういう暮しをしていたのか今ではもうよく憶えていない。ただ我慢するしかなかった。東日本大震災には国の内外から厚い支援があつたが、戦災ではそうはいかなかつた。

八月十五日終戦の大詔もラジオの奥から聞こえる玉音はもつと戦争を続けるとつた人もいるほど、真空管ラジオは性能が悪く、その真空管も貴重品であつた。その夜、電気にかぶせてあつた灯火管制のための黒い布をとつた時、こんなに世は明るかつたかと平和到来を実感できた。

戦時中は隣組が機能していれば配給で（衣類、酒、タバコは切符制）、（干し芋、干しかぼちゃ、大豆カスの入つた米「内地米↓南京米↓サイゴン米」）何とかしのげたが、戦後は、外地からの引き揚げ者、闇米の横行（経済警察の活躍）でかえつて食糧難となり買い出しに走り、物々交換の原始的経済となる。ある検事が闇米を拒否、餓死されたのもこの頃で、「米ヨコセ」の街頭デモもあり、新田切りかえもあつた。

最後に級友について少し触れておきたい。二年生頃、仙台の陸軍幼年学校へ行った紅顔の高田君は落馬して亡くなり、「山で死ぬのは本望だ」といつていた中村君はその通りとなる。

医者になつて順天堂産婦人科時代には伊勢谷、泉川君のお嬢さんのお産をとりあげたし、開業してから訪ねてくれたのは西鳥羽、工藤、中川、牧瀬、樫村、岡枝、泉川の諸君らであるが皆故人になられ、梶間君は元気である。医師となつた中村、柴崎、梅内、津布久の諸君がいたが小澤君を除きみなもういない。

いろいろふり返ると走馬灯のようにあれもこれもと思ひ出すが、元気でいるあいだは残つた級友と昔話をつづけるつもりである。今でも毎日、

息子（糖尿病専門）と診療をつづけ楽しくすごしている。これもさきにふれたが生来虚弱であったのが戦争というフィルターを通して心身共に鍛えられたからだと思っている。

城北中学校の歴史の第一頁は我々があの戦時の苦闘の末つくったもので、学校、後輩の諸氏にこの文集をぜひよんでいただきたいと願っている。